

谷崎潤一郎全集

第二十八卷

谷崎潤一郎全集 第二十八卷

定價一五〇圓

昭和四十三年十二月十一日印刷
昭和四十三年十二月二十五日發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一一
電話(五六一)五九二一
振替東京三四

目次

椎本	一
総角	翌
早蕨	一四七
寄生	一七一
東屋	二七五
浮舟	三〇九
蜻蛉	四三
手習	四九
夢浮橋	五七

椎 本

椎^{しいが}
本^{もと}

イ、匂宮

ロ、ハ、「わが庵は都の
たつみ然ぞすむ世を
うちやまと人はいふ
なり」〔古今集〕と詠
んだ喜撰法師のこと

ニ、夕霧

二月^{きさらぎ}の二十日頃に、兵部卿宮^イが初瀬^{はつせ}にお参りになります。前々からの御願^{ごがん}なのでした
が、久しい間果さずにいらっしゃいましたところ、何よりもあの宇治^{うじ}のあたりのおん中
宿り^{やど}が楽しみで、お思ひ立ちになったのでしょう。昔は「怨めしい所^{ころ}」と託^{かこ}った人もあ
りました里の名が、すっかり懐^{なつ}かしく思われるようにおなりになりましたのも、まこと
に埒^{らち}もないことです。上達部^{かんだちめ}がたいそう大勢お供なさいます。殿上人などは言うに及ば
ず、京に残った者は少いくらいにお供するのです。六条院から伝わって、右^ミの大^{おお}殿^{いとの}が
知行^{ちぎやう}していらっしゃいます御領地が、川の向う岸を廣々と占めていて面白いので、そこ
にお宿のしつらえをおさせになりました。お帰りには大臣^{おとど}もお迎えにお越しになるおつ
もりでしたが、にわかに重いおん物忌^{ものいみ}をなさるようになって、よう参上いたしま
せんというお詫^わびを申してお寄越しになりました。宮は何となく御不満にお感じになり

ロ、夕霧の一族の者が
宮の宿所をしつらえ
て饗応するのである

ましたが、折よく宰相中将さいしやうのちやうじやうが今日のお迎えにおいでになりましたので、かえってこの方が心やすく、かのおんあたりへ言い寄り給うつてがあるうと、お喜びになるのです。日頃から大臣をば打ち解けにくく、煙けむったいもののように思っいていらっしゃるからなのでした。が、御子息の公達きんだちの方々、右大弁、侍従宰相じゆうのさいしやう、権中将、頭少将とうのしょうじやう、蔵人の兵衛佐などは、皆伺候していらっしゃいます。帝や中宮がわけて御寵愛遊ばされる宮のことですから、一般の人々の尊敬も並々ではありませんので、まして六条院の御一門は、御縁につながる下々の人たちまでが、いずれも内々の主君のように存じ上げてお仕えになります。所にふさわしいお座敷などを趣深く用意しまして、碁ご、双六すうろく、彈碁たぎの盤などを種々いろいろと取り出して、思い思いに遊び暮されるのでした。

宮は旅にはお馴れになりませんので、おくたびれになりましたし、もとよりここにお泊りになろうという深い思召しもあったことですから、しばらく御休息になりまして、夕方にお琴ことなどを召してお遊びになります。例のことながら、こう浮世離れのした山里は、水の音などにも引き立てられて、ものの音色がいよいよ澄み渡るような心地がするのです。が、かの優婆塞うぱさくの宮のおんあたりでも、ほんのひと跣またぎほどの所ですから、風が伝えて来ます響きをお聞きになりますと、昔のことが思い出され給うて、「笛を大層美しく吹いているのが川向うから聞えて来る。誰なのであろう。昔の六条院のお笛は、

へ、桜咲く桜の山のさ
くら花散る桜あれば
咲く桜あり〔伊行釈
所引〕
ニ、いな菰川そひ柳水
ゆけばおきふしすれ
どその根たえせず
〔古今六帖〕

ひどく綺麗に、愛嬌のある音色でお吹きになったものだった。これは冴え冴えとして、少しものものしい感じが添うているのは、致仕の大臣の御一族の笛の音に似たところがある」などと独り言を言っておいになります。「ても、久しい間になるものよ。かよな管絃の遊びなどにも遠ざかって、あるかなきかの暮しをしながら過して来た年月の、さすがに多く積ったことを思うにつけても、生きがいのない命である」などとおっしゃったりしながら、それにつけても姫君たちのおん有様がいとおしく、あたらしい山ふところに埋れさせてしまわずに、何とかして世に出す工夫はないものかと思いつづけておいでになります。どうせ婿取りをするのなら、宰相の君のような人を縁者に持ちたいものだけれども、御当人はそんなことを考えていそうもないし、まして今時の輕薄な男などは嫌なことだしなどと、とつおいつお考えになりながら、所在なさそうにぼつねんとしていらっしゃいますあたりでは、明けやすいという春の夜も非常に長くお感じになるのですが、御遊に打ち興じ給う旅のおん宿りの方では、酔いの紛れにたいそう早く夜が明けた心地がしまして、宮はこのままお帰りになることを飽き足らなくお思いになります。

はるばると霞が棚引いている空に、「散る桜もあれば」今開き初める桜もあつたりしまして、色さまざまに見わたされて、水に映る「川そひ柳」の、風に靡いて起き伏しす

イ、山風に吹き送られて、霞の間を漏れて

笛の声だけは聞えて来ますが、あのはるかな川の白波が向う岸との間を隔ててい

ると見えて、あなたからお便りのないのが恨めしく思われま

す
ロ、「向う岸とこちら

岸に波が立ってお互いの間を隔ててはお

りますが、でも川風はとどこおりなくあ

ちらからこちらへ吹き通うてほしい」
で、「ただ今あなたと離れてはおります

が、お親しくしていただきますとうござい

ます」の意
るけしきなど、なみなみならぬ風情ですのを、見馴れ給わぬ都のお人はまことに珍しく見捨てがたくお思いになります。宰相の君は、こういう折を過ぎずに、かの宮のもとへ参りたいものよとお思いになるのですけれども、大勢の人の眼を避けてひとり舟を漕ぎ出し給うのも軽々しいようなと、ためらっておいでになりますと、あちらからおん文のお使いがあります。

イ
山風に霞ふきとくこゑはあれど

へだてて見ゆるをちのしら波

たいそう見事に、草仮名で書いておありになります。「さてはあのおんあたりから」と、宮もお察しになり、興深く御覧になりました、「そのおん返りごとは私がしまし

う」と、

ロ
遠近の汀の波はへだつとも

なほ吹きかよへ宇治の川風

中將は、やはりあちらへお伺いになります。管絃に心を打ち込んでいる公達を誘って向う岸へ棹ささせ給う間、酣酔樂を奏でるのでしたが、水に臨んだ廊から橋を造りおろしてある趣向など、場所柄に似つかわしく意匠を凝らしてある御殿ですから、皆々心づかいをして舟をお下りになります。ここのお住居はまた模様が変ってしまして、山里じ

へ、絃楽器を弾物、管楽器を吹物という
 ニ、催馬楽。「薄雲」
 九六頁頭注ニ参照
 ホ、桜人は双調の曲であるのを壹越調に変えて弾くのである

みた網代屏風などを、ことさら質素に、趣深くお飾りつけになりました、客人のためにきれいにあたりを取り片附けて、行き届いた用意がしておありになるのです。楽器なども、古くから伝わっています世に二つとない弾物どもを、わざとめかないように置いてありますので、公達の方々がつぎつぎに奏で給い、桜人を壹越調に変えてお弾きになります。主人の宮の琴のおんことを、かような折に聞かしていただきたいものとしたもお思ひになるのですが、箏のことの方を、あまり気乗りもなさらないように、ときどき人が弾くのに合わせてお掻き鳴らしになります。聴き馴れないせいか、若い人々はいそそう深みがあって面白いと感じ、身に沁みて聞いています。おもてなしぶりも、土地に相応した風流味がおありなされて、皇族のおん血筋というような、大勢の賤しからぬ身分の人々とか、王族の四位の年を取った人たちとか、かような来客のある時に人手がおありにならないのを、かねてお気の毒に存じ上げていたのでしょうか、そういう連中が残らず接待役を集って来ましたので、瓶子を取る者も見苦しからず、餘所で想像していましたよりは、いかにも優美に、古風ながらもしかるべき御饗応をなさいます。客人们の中には、姫君たちの住み給うあたりを思いやりつつ、心を悩ます者もいることでしょう。川向うの宮は、まして軽々しいことのできない御身分であらせられますのを、窮屈に思っているらしいです、せめてこういう機会にでもと、たまらなくおなり

なされて、見事な花の枝を折らせ給うて、お供に連れておいでになりました殿上童の、可愛らしい姿をしましたのをお使いにして、お上げになります。

イ、山桜が美しく咲いているこの宇治のあたりに訪ねて来て、

「山ざくらにほふあたりに訪ね来て

おなじかざしを折りてけるかな

『野をむつまじみ』と、たしかそんな風に書いておありになったようです。このおん返りごとは何としてなどと、お答えが申し上げにくくて、当惑していらっしやいます。

「かような折の御返事に、わざと御苦心を遊ばしたりして時がたちましても、かえってよろしからぬことだと申しますから」などと、老女たちが申し上げますので、中の姫君にお書かせになります。

「かざし折る花のたよりに山がつの

垣根を過ぎぬ春のたびびと

『野を分きてしも』と、たいそう麗しく、巧者にお認めになりました。

いかさま、川風も隔てを置かず吹き通いますので、あちらの岸でもこちらの岸でも樂の音をひびかせて面白くお奏しになります。おん迎えには藤大納言が、お上の仰せごとを蒙ってお越しになりました。皆々一緒に集って、賑やかに急いでお帰りになります。若い方々は飽き足らないで、しきりに後を振り返るのです。宮はいずれまたいい折を

のたびびと」を匂宮
にたとえた歌

ミ、出典不明。「野を
むつまじみ」と言っ

たのに対し、「特に
野を分けて私の宿を
お訪ね下されたわけ
でもありますまい」
という意

ホ、「遠近の汀の波は
へだつとも」の歌の
意を受けて言う

へ、思ひやれ霞こめた
る山里の花待つほど
の春のつれづれ〔後
拾遺集〕

見てとお思ひになります。花の盛りの頃で、霞棚引く四方の眺めも風情がありますので、人々の詠み出した詩や大和歌もいろいろとありましたけれども、面倒なので詮索もせずにししまいました。宮は何かと慌しくて、思うようにも書いてお上げになれませんでしたのがお心残りで、それから後は人の手引きがありませんでも、いつもじきじきにおん消息をお上げになりました。こちらの宮も、「やはり御返事はしてお上げなさい。しかしこ」とさら懸想めかしては書かぬようになさい。後でかえって気が揉める種にもなりますからね。えらい好者の親王ですから、こういう人がいるなどとお聞きなされると捨てておかれず、お戯れの文を下さるのでしょう」と仰せながらもお勧めになりますので、ときどき中の姫君が御返事をなさいます。大姫君はお考え深くて、そういう風なことは冗談にもなさらないのです。

いつということなく、常に心細いおん有様で過しておいでになりますので、「春のつれづれ」はひとしお暮しにくくて、物思いに沈んでいらっしゃいます。だんだん大きくおなりになります姫君たちの、日増しにお姿や顔形が美しく、申し分のないようにおなりになりますのが、父宮としてはかえって辛く、いっそ不器量であってくれたら、もったいないだの惜しいだのと思う気持がこう強くはあるまいなどと、あけくれ胸をお痛めになります。今年は大姫君が二十五、中姫君が二十三におなりなされました。父宮は

重い厄年やくだじに当っていらっしやるのでした。何となく心細くお感じになりました、常よりもなお油断なく勤行ごんぎょうをなさいます。もとより浮世には未練もおありになりませんお方の、後世ごせをねがい給う御一念ばかりですから、未来は浄土にお生れになるにはきまっていますものの、この上もない堅固な御道心のうちにも、姫君たちのお身の上ばかりはひどく氣にかけておいでになりますので、いまわの際きわにこの方々をお見捨てになりにくくて、必ず取り乱し給うであろうと、お側の人々もそこを思ってお案じ申し上げているのですが、かねがね望んでいらっしやるほどの相手ではないにしましても、世間体もそう悪くないような、これなら我慢ができるというくらいな身分の人で、真ごころからお世話申しましようなどと言ってくれる者があったら、大目に見て許すことにしよう、どちらか一人が縁を求めて身を固めたら、もう一人の方はまたその人が心配をしてくれることと思って、安心もおできになりますけれども、それほど心を傾けて言い寄るような人もいません。たまにはちょっとしたついでを見つけて懸想けんそうめいたことを言ってきたりする人、または若い心の戯れから、物詣ものもぎでの中宿りとか、旅の道すがらの慰みに、それらしいけはいを見せて、世に埋うもれていらっしやるのをいいことに、失礼なことを言う人はありますけれども、そんなけしからぬ手合いにはろくな御返事をさえないません。そういう中でただ三宮は、やはりどうしても逢わずにはおかぬと深く思い込んでいらっしや

イ、「竹河」五一三頁
参照

るのでした。これも前の世からの約束事だったのでしょいか。

宰相中將は、その秋中納言におなりなされました。いよいよ立派におなりになり、官位も昇るにつれまして、いろいろとおん物思いをなさることが多いのです。どういいうきさつがあったのかとよく考えつづけていました以前よりも、それと知った今は心苦しくて、お亡くなりになった方の当時のことが思いやられますので、何とかその罪が軽くおなりになるように、勤行もしたいと思われるのです。あの老女を可哀そうな者と思つて、目立たぬように何かのことにかこつけながら、情をかけてやっていらっしゃいます。その後宇治へも久しく御無沙汰をしていたことをお願い出しになりました、お伺いになります。それは七月頃のことなでした。都にはまだそのけはいも見えませんが、音羽の山の近くではもう秋風の音もひややかに、槇の尾山も木々の梢がそろそろ色づき初めていまして、なお奥深く分けて行きますと、あたりのけしきが面白く珍しく思えるのでしたが、あちらの宮では久々のことなので、ましていつもよりもなつかしうがらせ給い、例になく心細うなこともをそれからそれとお話しになります。「私が亡くなりした後も、この姫たちを何かの折にはお訪ね下すつて、お見捨てにならないように願います」などとその方へ話を向けながらお頼みになるのでしたが、「前にもちよつとそんな仰せがございましたのを承っておりますから、決して疎略には存じ上げません。

浮世には未練を残さないようにと、なるたけ係り合いを少くいたしておりますので、何事によらず、この後ともあまりお役には立ちかねるおぼつかない身でございますが、こんな風にしましても生きながらえております限りは、どこまでも変らぬ志を御覧になつていただこうと存じているのでございます」などと申されますので、たいそう嬉しくお思ひになります。夜更けの月が鮮かに光を投げて、もうじき山の端に沈みそうにしていますので、しみじみと念誦し給うて、なおも昔物語をなさいます。「近頃の世の中はどういう風になったのやら。昔は禁中などかような秋の月の晩、お前の御遊の折に伺候している人々の中で、名人とか上手とか言われる限りの人々が、とりどりに合奏したものです、そういう仰々しい催しよりも、その道の聞えのある女御更衣などの御局御局の、心のうちでは互いに鎬を削りながらもうわべは睦くし合っていますのが、夜が更け渡ってあたりがひっそりとした時分に、訴えるように掻き鳴らすものの音色のぼつりぼつりと仄かに漏れて来たりするのは、かえって聞き所のあるのが多かったものでした。何事につけても、女は遊びの相手にするのに都合がよく、益体もないものながら、人の心を動かす種になるものです。そんなわけで罪障が深いのもありませんか。子ゆえに迷う親心を考えてみましても、男の子だとそれほど心を乱すことはないでしょう。女の子は運に限りがあって、丹精のしがいが無いようなものだ」と諦めてみても、やはり

い、香山大樹緊那羅
於佛前彈瑠璃琴。
奏八万四千音樂。
迦葉尊者忘威儀而
起出。(法華文句所
引、大樹緊那羅經)
迦葉は釈迦十大弟子
の一人
、私が亡くなってこ
の山莊が荒れ果てる
ようになって、姫
たちの面倒を見て下
さると言われたあな
たの一言は、間違い
あるまいと思ってい
ます。「ひとこと」
の「こと」に「琴」
を利かしてある。
「かれじ」(枯れじ)
は草の縁語で、「約
束した言葉は枯れず
に生きている」の意

氣にかかって仕方がないものです」などと、世間話にかこつけて仰せになりますので、ほんに、そうお思になるのもごもつとものことよと、御心中がいたわしく思いやられるのです。「私などは、万のことに執着を絶つように心がけておりますまいか、自分には何一つとして身についた藝能も持ち合わせませんが、音楽というものを賞でる氣持だけは、つまらないことのようにございますけれども、捨てるわけに参りません。さればあの偉く悟りました迦葉尊者も、琴の音を聞いて起って舞ったのでございましょう」などと申し上げて、いつぞやちらと残り惜しくも一声聞いた姫君のお琴を、しきりに所望なさいますので、宮もそういうきかけから親しみ合うようになってくれたら、とてもお思になったのでしょうか、おん自らあちらへお渡りになりました、切にお弾きになるようにお勧めになります。と、箏のことをほんの僅か掻き鳴らしてお止めになります。ただでさえ静かな山里の、いよいよ人のけはいも絶えて、空のけしきも、あたりの有様も、しんみりとしています折から、何気なく奏でられたものの音に、君は引き入れられて面白くお感じになるのですが、打ち解けて合奏なさることなどは、とてもお望みになるべくありません。「これだけお引き合わせしました上は、あとは自然お若い同士にお任せ申しましょう」と、宮は佛間におはいりになりました。

「われなくて草の庵は荒れぬとも